

# 月報

No.458  
2018年  
7月



日本キリスト教団  
茅ヶ崎香川教会  
茅ヶ崎市香川1丁目34-35  
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

## 説教 『 イエスのしるしに応答する人々 』

ヨハネによる福音書 6章1節～15節

小河信一 牧師

本日は、ヨハネ福音書により、五つのパンと二匹の魚が増加するという有名な奇跡の場面をご一緒に読みます。

今、ご臨在してくださっている神の示しを祈り求めつつ、旧約の列王記下 4:42-44 に照らし、新しい教えとして、この出来事を受け取り直したいと思います。

列王記下 4:42-44——

42 一人の男がバアル・シャリシャから初物のパン、大麦パン二十個と新しい穀物を袋に入れて神の人のもとに持って来た。神の人は、「人々に与えて食べさせなさい」と命じたが、43 召し使いは、「どうしてこれを百人の人々に分け与えることができましょう」と答えた。エリシャは再び命じた。「人々に与えて食べさせなさい。主は言われる。『彼らは食べきれずに残す。』」44 召し使いがそれを配ったところ、主の言葉のとおり彼らは食べきれずに残した。

この神の人・エリシャにまつわる出来事は、ヨハネ福音書のパンと魚の増加の奇跡に、非常に類似しています。

ヨハネ福音書6章では、大麦のパンと魚の提供者として、共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）には見られない「少年」が登場します。それと並行するかのよう<sup>に</sup>、列王記下4章には、「一人の男」が現れ、大麦のパン<sup>その他</sup>を差し出します。過越祭（ヨハネ6:4）の時季（3月～4月頃）は、大麦の収穫期にあたりますから、大麦パンを携<sup>たずさ</sup>えているというのは、自然なことです。「少年」と「一人の男」という、いわば脇役が、神または主イエスが増やす元となるものを提供しているのです。

さて、列王記下 4:42-44 の出来事には、重要な二つのメッセージが込められています。

一つのメッセージは、「主は言われる。『彼らは食べきれずに残す。』」と「主の言葉のとおり彼らは食べきれずに残した」と、繰り返して強調されている通り、神の恵みはあり余る（ヨハネ 6:12-13）ほどに豊かだということです。それはまさに、「その地は飢饉に見舞われていた」（列王記下 4:38）というどん底の中での出来事でした。

信仰者としての私たちに対する、このメッセージはシンプルです。神を信じなさい、神の恵みはあり余るほど豊かなのだ、ということです。問題は、それを、信じられるかどうか、です。言うまでもなく、目の前の現実を見つめることは大切ですが、私たちは、私たちの思いを超えたところにある神の恵みを見ているでしょうか、それを信じているでしょうか。

もう一つのメッセージは、列王記下 4:42-44 を順序立てて場面を思い描くと汲み取ることができます。

ある春の祝うべき祭りの時に、大麦の初穂で焼いたパンが、ある男によって、神の人にささげられました。祭りをつかさどる神の人に、ということは、神ご自身に奉納したということです。一人の男によって、感謝をもって「初物のパン」や「新しい穀物」がエリシャのもとに持って来られました。エリシャは多分、その「初物」を神にお供えしたことでしょう。そして、このことは、教会の祭り（イースターやクリスマス）の際に、自分の献金や労働の果実をささげるという点で、私たちの信仰生活とも関連しています。

さて、この時点では、何らの問題も生じていません。しかし、次の瞬間に、問題が露呈します。

列王記下 4:42-43——

42 神の人は、「人々に与えて食べさせなさい」と命じたが、43 召し使いは、「どうしてこれを百人の人々に分け与えることができますでしょうか」と答えた。

エリシャから、彼の召し使いに、「あなたの周りの人に分け与えなさい」という命令が下ったときに、難題が湧き起こりました。明らかに（計算上）、食べ物不足している、ということです。一瞬、エリシャの召し使いは、「どうして、私が分け与える係をしないといけないの?!」と思ったかもしれません。

片や、捧げ物を差し出す一人の男と少年、片や、計算に走って戸惑う召し使いとフィリポまたアンデレが立っています。霊的な果実が神にささげられ、そして、人々に分かち与えられるという、その過程で障壁が生じているのです。すなわち、心を尽くして神を愛する、そして、隣人を自分のように愛する（マタイ 22:37-39）、ということが円滑に進まなくなるのです。二つの最も重要な掟が全うされていないことが、殊に「隣人を自分自身のように愛しているか」と問われるときに、露わにされます。

自分に、「あなたの周りの人に分け与えなさい」という使命が与えられたときに、これでは途中で不足するのではないか、あるいは、なぜあの人は自分の分け方に文句を言うのか、さらには、どうして他の人は施しも分け与えもしないのか、というように、私たちの心が千々に乱れることがあります。

神に捧げることは、ある意味では易しい、しかし、隣人に捧げること、すなわち、隣人に奉仕したり、隣人に施しをしたり、隣人を助けたりすることは難しいものなのです。

つまり、目に見える人間関係の中では、単純に「初物・施しを持って来た」というわけにはいきません。その時の相手の気持ちや状況をおもんばかり、行わなければならないからです。相手が「それだけでは足りません」と言う時もあるでしょう。贈られた！ もらった！ にもかかわらず、けちを付ける人もいるかも知れません。

喜ばしい「初物」(出エジプト記 34:22) を、神に捧げ、そして、隣人と分かち合うこと……それは確かに、神からの恵みである「初物」の信仰的な取り扱いです。大切なことは、「初物」奉獻ではなく、私たちがいかに、神を愛し、自分自身のように隣人を愛しなさいという主イエスの愛の掟に従うかどうか、です。その愛の掟を全うするために、どれほど私たちが祈り、謙虚に、愛と知恵をもって忍耐強く行かうか、が問題なのです。召使いやフィリポ、アンデレのように、隣人への饗応・もてなしについて、速断するのでは、最も大切な愛が見失われてしまいます。

列王記下 4:43-44——

43 エリシャは再び命じた。「人々に与えて食べさせなさい。主は言われる。

『彼らは食べきれずに残す。』」 44 召し使いがそれを配ったところ、主の言葉のとおり彼らは食べきれずに残した。

飢饉の最中でもあり、エリシャは食べ物を行き渡らせることが困難であることは知っていたでありましょう。しかしエリシャは、「目を上げた」主イエス(ヨハネ 6:5)のように、天を仰いで、ただただ神の言葉を取り次いだのです。大麦パン二十個を「恐れずに、分け与えよ」ということです。すると、「彼らは食べきれずに残した」というように、御言葉が成就しました。日毎の糧を用意してくださる神、神の恵みの豊かさがあらわされました。

神の人・エリシャにまつわるこの出来事を想起させるかのように、主イエスは、パンと魚の増加の奇跡を行われました。

ところで、本日の説教題を、「イエスのしるしに応答する人々」と付けたのですが、少し解説致します。

「イエスのしるし(パンと魚の増加)に**応答する人々**」という、その「人々」は聖霊の導きの中で、主イエス・キリストをまっすぐに見て、応答しているものではありません。むしろ、その「人々」の応答は、誤ったものであり、自己中心なもので

ありました。すなわち、彼らの応答に見習ってはいけない、反面教師なのだ、ということ。K.バルトが、ヨハネ 6 章全体の主題として、「真の食べ物を与えるお方としてのイエスと、イエスに対する不信仰という抵抗」という対句を掲げていますが、それはヨハネ 6:1-15 にも当てはまります。

ですから、ヨハネ 6:1-15 を読む私たちの課題は、「不信仰という抵抗」を止め、しるしを為される主イエスご自身に、御心に適った応答をする、ということです。

ヨハネ福音書 6:15——

イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。

自分中心の、誤った応答とは、まさにこのことです。「連れて行こう」の原意は、「暴力で奪い取る」です。ローマ帝国に反旗を翻す、自分たちの気に入る王に、力づくで担ぎ上げようとする強引さが露わです。ここには、イエスが、メシアなる王（ヨハネ 1:49、12:13）なのかどうか、イエスの言葉に耳を傾け、霊的にそのしるしを受け止めようという、謙虚な姿勢はありません。

ヨハネ福音書 6:1-4——

1 その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。2 大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。3 イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。4 ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。

春の収穫の時季を迎えたガリラヤ湖畔という設定です。問題は、「しるしを見たから」、「大勢の群衆が後を追った」というその人々が、ほんとうに主イエスに出会うかどうか、です。主イエスご自身が、ここにおられるということ自体が、大きな喜びであり救いである、と人々は気がつくのでしょうか。

この場面で、主イエスは、神の威厳を持った、神の子にふさわしい行動を示されています。

ヨハネ福音書 6:3——

イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。

ヨハネ福音書 6:15——

イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。

ひとたび、そしてふたたび、主イエスは山に向かわれています。パンと魚の増加の奇跡が山腹または丘で行われたとすれば、主イエスはひとりで山中にわけ入ることがあったということでしょうか。

主イエスによる供食の奇跡は、先駆者エリシャのしるしをひな型として、成し遂げられました。「恵みを超えて恵みを」（ヨハネ 1:16）あらわされるところに、神の子たるイエス・キリストの威厳が示されています。

思えば、ひとたび、そしてふたたび、山に向かった先駆者が、旧約聖書中にいます。それは、旧約聖書の中でも最も重要な事件において取られた行動、より正確には、神の命令の下での人の行動ですから、見逃すことはできません。

十戒の授与の際におけるモーセ——

出エジプト記 19 章 モーセ、シナイ山に登る。

出エジプト記 20 章 十戒の授与

出エジプト記 32 章 山のふもとで、民が金で牛の<sup>ちゅうぞう</sup>鑄造を造る。

出エジプト記 34 章 モーセ、再びシナイ山に登る。十戒の再授与

ひとたび、ふたたび、山に登ったことと共に、モーセとイエスに共通しているのは、ひとたびとふたたびとの間に、人々の神への反逆や抵抗が突発したということです。荒れ野を旅する民が礼拝するように、また人々が聖なる食事をするように、神が導き出してくださった山のふところにおいて（出エジプト記 19:2,4,17）、彼らは悪を為し悪に染まったのです。

彼らの<sup>かたわ</sup>傍らに立つモーセとイエスは、ひとり山で祈り、そして人々の間で、神の御言葉と御業をあらわしました。兄アロンも弟子フィリポも、モーセやイエスに寄り添うことがない中で……。主イエスは全く孤独でありながらも、その傍らにモーセという神の<sup>しもべ</sup>僕がいたのです（ルカ 9:30）。

ヨハネ福音書 6:7-9——

7 フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。<sup>8</sup> 弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。<sup>9</sup> 「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」主イエスが「どこでパンを買えば」と尋ねているにもかかわらず、フィリポは「どれだけのパンを買えば」というように、勘定計算に走ってしまいました。アンデレは、少年によって捧げられる物も「役立たない」と決め付けてしまいました。

そうです、ここでは、「どこで」・「どこから」——「主イエス・キリストのもとで」・「神の恵みから」ということに、心を集中し、主を信じることが大切だったのです。自分が実直であること、また自分で将来を見通すこと、それらの「善いこと」が神の前では「役立たない」こともあるのです。

ひとたび、そしてふたたび、主イエスが山に向かい、父なる神の御旨を問い、御心を成し遂げられようとしている時、まさにその時に、弟子たちはじめ人々は、不安や疑いや自分勝手な思いに取り憑かれていました。

しかし、主イエスはそのような罪に染まった人々を見捨てられませんでした。モーセが激怒した神を慰め、民のとりなしをなそうとしたように、主イエスは人々の間で、御言葉を語り、神のしるしをあらわされました。

ヨハネ福音書 6:5——

イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われた。

共観福音書の並行記事には、「この人たちに食べさせるには……」という主イエスからの問いかけは見られません。共観福音書では、群衆の空腹を指摘してパンを買う必要のあることを言い出すのは、弟子の側です（マタイ 14:15、ルカ 9:12）。しかるに、ヨハネ福音書では、まずイエスご自身がそのことを口に出しておられます。ここに、「イエスの主導性」が昭示されています（松永希久夫）。すべてことを導かれる主イエスが、人々の空腹や疲れに配慮されています。

ヨハネ福音書 6:14——

そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に來られる預言者である」と言った。

主の前に、信仰告白をなした<sup>ひとむ</sup>人群れがおりました。「預言者」の箇所が「救い主」となっていれば、さらに信仰的だったのでしょうか。この直後には、主イエスを強引に「王」に仕立て上げようという人々の悪意が見られたと証言されています。イエスのしるしに対する応答は、人々の間で一律ではなかったということでしょうか。いずれにせよ、人々がまことの信仰告白へと至る中で、罪への誘いが襲い来るという現実が垣間見られます。

最後に、今日を中心聖句を読みましょう。

ヨハネ福音書 6:11——

さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。

聖餐式に特徴的な四つの進行過程は、以下の通りです（マルコ 14:22、I コリント 11:23-24）。

①パンを取る。②感謝する。③パンを裂く。④分け与える。

ヨハネ福音書 6:11 の描く主イエスの所作では、③に言及されていませんが、主の晩餐から聖餐式へと至るその原点が、ここにあります。

もう一度、列王記下 4:42-44 で提起されていた問題を振り返りましょう。

飢饉の最中に、エリシャによって、神の御言葉と御業とあらわされました。そこで、私たちに問いかけられていることは、神のあり余る恵みを心から信じるか、そして、神から与えられた恵みを、兄弟姉妹の間で分かち合えるか、ということです。端的に言えば、ほんとうに神を愛し信じるか、そして、ほんとうに隣人を愛し助けるか、ということです。

列王記下 4:43 の「召し使い」という語は、職業を表すというよりも、むしろ、「常に仕えている人」、すなわち、神と人とに献身的に「仕えている人」を指しています（この意味に従えば、最初に初物と新穀を持って来た一人の男がその人なの

かも知れません：列王記上 10:5、19:21)。そうだとすれば、食べ物増加のしるしを行ったエリシャの真意は、周りの人々に対し、「あなたがたは、神と人にとに仕える者になるか」、と尋ね求めるところにあったと言えましょう。

使徒言行録 6:1 ステファノたち七人の選出――

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。

人間の社会というのは、ささいなことで不公平が起こります。「ギリシア語を話すユダヤ人」と「ヘブライ語を話すユダヤ人」との二グループにおいて、一方が他方に軽視されるという問題が生じました。初代教会の、このささいな事件は、今の私たちの教会とは無縁であるとは、残念ながら言えないでしょう。

では、どうすればよいのでしょうか？

それは唯一つのこと、イエス・キリストを神の子として信じること、です。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」（ヨハネ 1:16）という「この方」がイエス・キリストであると、知らされる（エフェソ 3:3）ことです。

そして、私たちが隣人を愛し、分かち与えるとき、私たちが周りの目を気にするとき、まさに「分け与えられた」主イエスに見倣い、従うことです。主イエスが皆に仕えられたように、私たちもまた、皆に仕えることです（マタイ 20:26-28）。主の愛と知恵をもって、分かち合おうではありませんか。

私は、弱く貧しい者です。小さな土の器です（Ⅱコリント 4:7）。しかし、私たちには、神から贈られた恵みがあります。神から与えられた霊の賜物があります。主にあって私たちは、それぞれが「わずかなもの」を差し出し、そして助け合うことができます。何よりも、主イエス・キリストがそれらを受け取り、感謝と祝福をもって、<sup>きよ</sup>潔めてくださいます。

主イエスは私たちを招き、盛大な祝宴を開いてくださいます（ルカ 5:29、15:32）。主イエスが中心におられて、そのような食事がなされるということが、教会の聖餐式の内に約束されています。

主イエスが真ん中にいてくださる食事に招かれている者、パンと杯の恵みを味わい知る者として、新しい一週間を歩み始めたいと願います。